英文學にあらはれたる子供（十一）

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

『ジエーン アィア』
(gane Eyre)

ジエーンアィアは女作家ブロンテ（Brontë）の有名の小説で女主人公の名を取つて題としたものです。始數十ページは可憐の孤兒ジエーンが伯母の家で厄介者扱せらるゝ所を描いたもので一讀坐らに哀を催します。例によりその大略を下に掲ぐる事に致しました。

（一）

其日は運動には出られさうもなかつた。朝、一時間ばかり葉もない樹林の中を子供達皆で逍遙したのだが、晝食後（リード夫人は御客の無い時は晝食を早く濟すので）からは、寒い風が黑雲と、浸み透るやうな雨とを誘つて來たので、戸外の運動などは思ひもよらぬ事になつた。

ジエーンは宜い鹽梅だと思つた。此子は長い散歩は殊に冷える午後などは、嫌ひであつた。底冷のする夕方に指の先がビリ〳〵痛くなつて、エリザやヂョンやヂョーヂアナなどの從兄弟達に體格の及ばぬのに氣は引けるし、おまけに、乳母のベシーに叱られて心細くもなつて、家へ戻るのは、厭で堪らなかつた。

エリザとヂョンとヂョーヂアナは今御客間で、母さんの周圍に集まつてゐる處で、母のリード夫人は、暖爐の傍への長椅子に身を横へて、愛兒等を引寄せて（此間だけは喧嘩も泣聲も起らない）滿足の體であつた。ジエーン丈は其仲間から省かれて居た。「御前を離して置かなくてはならぬのは氣

の毒だが、止むを得ない。ベシーにも訊き正して見、又、私の目にも御前が人懐しい、子供らしい氣性（もつと陽氣で、無邪氣で、自然な）になろうと心懸けるのが見える迄は、機嫌の良い、可愛い、子供達の仲間入はさせられぬから」と夫人は言ひ聞かせた。

「私が何をしたって、ベシーが言ふのです」とジェーンは尋ねた。

「理窟を言つたり、聞き返しをしたりする人は私は嫌ひです。大人に對つてそんな風をする子供は、どうも可愛氣が無い。何處ぞへいつて坐つて御出で。もつと優しく口がきけなければ、默つて御出で」

御客間に接して小さい部室があるので、ジェーンは其處へそつと入つた。本箱が一つある其中から、一冊の本を、—但し畫入りのであるのを確めてから—ジェーンは手にした。而して窓の閾に登つて、足を疊み込んで盤坐いた。その上に赤いモリン布の窓掛を搔き合せて、二重に人目から隱れてしまつた。

ジェーンの右側の眺めは、赤い窓掛の襞で閉されてゐたが、左側は窓ガラスなので、十一月の寒さを防いで、しかも光線を遮らなかつた。書物のページを繰りながら、時折、ジェーンは、冬の午後の景色を眺めた。遠方は霧だか、雲だかで一面に薄鼠にボーッとなつて、近くは、濡れた芝生と、風に搖ぐ樹立と、長く凄く吹き荒む大風に捲くられて、絶えず沫き飛ぶ雨とばかりであつた。

ジェーンは再び書物へ目を落した。ベキックの著「英國鳥類の歷史」といふので、字の部分は餘り好まなかつたが、畫は一々意味があるので、何れも〳〵面白い事は非常であつた。但し發達せぬ子供の智力感情では、不思議と思はれるのも澤山あつたが、時々ベシーが冬の夜など機嫌のよい時に、子供部室へ熨斗臺を持込んで來て、子供達を其周圍に座らせて、奥樣のレースを仕上げたり、

自分の帽子の縁を縮らせたりしながら、御伽話や、昔の小唄の中から、種々の話をして聞かせて呉れる、その話に劣らず興ある事に思はれた。

書物を膝に載せてジェーンは一兎に角此子としては一相應に樂んでゐたので、唯恐れるのは邪魔の入る事だけであつたが、其邪魔は忽ちにして實現せられた。部室の戸が明いて、

「こら！偏屈者！」とヂョンの聲がして、後は途絶えて終つた。誰も居らぬと思つたらしい。併しやがて、

「一體彼の子は何處に居るのだろう、エリザさん、ヂョーヂさん」と姉妹達を呼び立てゝ「ジェーンは此處に居ませんよ。雨の中へ出て行つたと母さんに言ひ付けて御やりなさい！　太い奴だ！」

ジェーンは窓掛を引いておいて宜かつたと思ひながら、何卒此隱家が見付けられないやうにと祈つて居た。ヂョンは敏捷い子でないから、一人ならば見付ける筈はなかつたのだが、エリザが部室の入口に首だけ差し入れて、直ぐ樣「必然窓の敷居の上に居るのよ」と言つた。

ジェーンはヂョンに引摺り出されるのが恐ろしくて、立所に出た。

「何の用があるのです」と手持無沙汰に氣後れがしたジェーンは尋ねた。

「何の御用です坊ちやんと御言ひな。此處へ御出でなさい」とヂョンは答へて、肱掛椅子に坐つて、手眞似でジェーンに傍へ來て立てと知らせた。

ヂョンは十四才の少年で、ジェーンより四つ年上だが年齡の割に大柄で肥滿つてゐて、肌が荒くて艶氣なく、顏貌重くろしく、而して手足は太く大きかつた。貪り食ふ癖があるので目がどよんと爛れたようになり、頰は締りなくたぶ〳〵してゐた。學校で勉强してゐるべきだのに、身體虛弱との名義で、一二ヶ月の靜養に母親が自宅へ連れて來てゐるのであつた。家庭から此子に贈つてよこす菓子類の分量を減らすのがこの子の利益だと先

生は確く斷言するのだが、親心には其が冷酷の評語と受取れて、否ヂョンの顏色の黃ばんで居るのは、勉强の度が過ぎるのと、家庭へ歸りたさの心の腦みの爲だなどゝ、母親は上品に考へて居た。

ヂョンは母をも姉妹達をも、あまり懷かしむ樣はなく、ジェーンをば譯もなく忌み嫌つた。ジェーンを虐め呵責する事は、唯に一週に兩三度とか、一日に一二回といふのでなく、年百年中で、ジェーンも心からヂョンを恐れて、此少年が傍へ來ると、身體が自から竦む感があつた。その恐嚇と呵責に逢つては、哀訴などは全然利目がないので、時にはあまりの恐ろしさに、ジェーンは我を忘れて茫然とする事さへもあつた。女中共も、ジェーンの肩を持つて、若主人の機嫌を損ずるのを好まないし、リード夫人は此點には、聾盲に等しいので、縱令その面前で（蔭でする方が多いのだが）ヂョンがジェーンを打つたり、惡口を言つたりする事があつても、全く目にも耳にも入れずに居た。

ヂョンの言ふ儘にするのが癖になつてる、で此時もジェーンは、その椅子の傍へ行つた。すると、ヂョンは舌の根の拔けさうになる程、舌を出してやゝ暫時ジェーンを見て居た。ジェーンは、今に必然打たれる事と思ひ、それを怖れながらも、打つ人の顏の醜さよとつく〴〵眺めて居た。その顏付でジェーンの心中を悟つたものか、ヂョンは、物も言はず、いきなり烈く此少女を擲つた。打たれてジェーンは蹌踉きその拍子に一足二足後下りをした。

「今のは御まへが先刻母さんに失禮な返事をしたのと、窓掛の蔭にこそ〳〵隱れてゐたのと、今爲た目付の罰だ！　惡る鼠め！」

ヂョンの暴言には馴れてゐるので、ジェーンは口答をしやうなどゝは更にも思はず、無禮の雜言に伴隨してくる打擲を、如何辛抱しやうと唯其ばかりを氣にして居た。

「窓掛の後で何をしてゐた？」

「本を讀んでゐたんです。」
「その本を見せろ。」
ジエーンは窓の處へいつて、本を持つて來た。
「此家の本を持ち出す法はない。御前は此家の厄介者だと、母さんはいつていらつしやる。御金もないンだ。御前の父さんは、一文も殘していかなかつたのだ。だから御前は、乞食になるのが當然で、僕等のやうな上等の人達と、一所の家にゐて、同じものを食べて、衣類まで母さんに着せて頂く筈はないのだ。僕の本棚を混亂せるとかうだといふ事を敎へてやる。—この本は皆僕のだからね。この家だつてそうだ—今は兎に角、ぢきに皆僕のになるのだ。あの戸の處へ行つて、鏡と窓から離れて立つて居ろ。」
ジエーンは言はれる通りにした。始はヂョンが何をする氣だか悟らずに居たが、例の本を差し上げて、今や自分に投げ付けさうな態度なのを見て、思はずアッ！と叫んで小脇に退いた。しかし時已に晩し。本は飛んで身に當つて、ジエーンは仆れた！　その途端に戸に頭を打當てゝ傷が出來た！血は出る、痛みは烈しい。ジエーンの恐怖は絶頂を越えて、恐怖以外の感情が勢力を得て來た。
「酷い、非道い惡人め！人殺し見たやうな！奴隷虐め！羅馬の帝王見たやうだ！」
ジエーンは、ゴールドスミスの羅馬史を讀んだ事があるので、ニロ王、カリグラ王などに就いての知識があつて、心中密かにヂョンと比較をしてゐた其がつひ口に上つたのであつた。
「何！何！僕に對つてそんな事を言ふか！聞いたかい！エー？エリザもヂョーヂャも、母さんに言はないで置くものか！だが其よりも先」
とヂョンはいきなり走り寄つて、ジエーンの髪と肩を把んだ。其樣は暴君、殺人者の形相を備へてゐた。ジエーンは頭部から頸へ血の雫が流れ傳はつて、ヒリ〳〵痛む感じが、恐怖の念よりも强く心を支配したので、死物狂になつて彼に應じた。

自分の手で敵を如何したのか記憶は無いが、ヂョンは惡鼠！惡鼠！と吼つて居た。加勢は近くにありで、エリザとヂョージアナは二階へ行つてゐたリード夫人の許へ驅け付けた。夫人はその場へやつて來た。ベシーも仲働きのアボットもあとから隨いて來た。二人は引き分けられた。誰だか「まあ〳〵坊ちやんに食つて掛かるなんて途方もない亂暴な」とか「こんな癇癪持ッてあるでせうか」とか言つてゐた。リード夫人は

「赤部室（レッドルーム）へ此子を連れて行つて、押込めてお置き」

と附け足した。

二人の召使の手に掛けられてジェーンは直（すぐ）と二階へ運び去られた。

（二）

途々ジェーンは反抗した。之は常にない事で猶更ベシーとアボットの惡意を增させるやうになつた。實はジェーンは少し氣が變になつて居たので、唯一瞬時の亂暴で思ひ掛けぬ罰を蒙るのなら、一層暴（あば）れるだけ暴れた方がと、狂妄（やけ）になつてさう思つた。

アボットさん、その腕を押へて下さいよ。氣狂（きちがひ）猫見たやうだ。」

「呆れかへるよ、ジェーンさん。坊ちやんを打つなんて。飛んだ恐ろしい仕打ではありませんか。御恩になつて居る方の御子を、あなたの若御主人をさ。」

「主人だつて！　如何して私の主人なの。私や女中かへ。」

「いゝえ女中よりも、もつと下等なのです。何も爲ないで養つて貰つて居るのですから。其處へ坐つて懺悔でもなさい。」

二人はリード夫人の命じた其部室へジェーンを連れ込んで腰掛に着かせた處なのだが、ジェーンはその刹那の考で彈かれたやうに跳び上つた。すると、二人の女は立所に取押へて、

「靜（じつ）として居ないと縛り付けますよ。アボットさ

ん、あなたの靴下留を貸して頂戴。私のなんかすぐ引切られて終いさうだから」とベシーが言つた。

アボットはその太い脛から靴下留を外さうとした。ジエーンは、縛る準備を見縛せらるゝ屈辱を思つて、激した心もやゝ我に歸つて、

「そんなもの外さなくとも宜い！動きはしないよ。」

と保證して我から腰掛に腰を下ろした。

「では必然ですよ」とベシーは念を押して、ジエーンが落ち着きさうなのを見届けてから、手を放した。それから、アボットと二人で腕を拱いて、ジエーンの顏を忌々し氣に眺めて、正氣で居るのか知らんと疑ふ氣色で、

「あんな亂暴を今迄した事はないのだが」とベシーは、アボットに對つていつた。

「でも生來さ。私や奥さんに此の子に就いての思はくを折々申上げると、奥さんもさうだと仰るのですよ。狡い子だからね。この位の年でこんな陰險な子は滅多にありませんよ。」

ベシーは之には答へずジエーンに對つて、

「あなたね、此家の奥さんの厄介になつてゐるのだといふ事をよく覺えていらつしやい。食べさせて下さるのですからね。此家から追出されゝば養育院へ行かなくてはならないんですよ。」

ジエーンは答へる詞はなかつた。珍らしくもない！物心の付く抑々から言はれてゐる事で、自分が厄介者だとの苦情は、一種の歌―苦痛な壓へつけられるやうな、者にも意味のよく解らぬ―頭見たやうに思はれた。

アボットは横かち口を出して、

「お嬢さんや坊ちやんと同等だなどゝ思ふと間違ひですよ。奥さんが親切で御子樣方と一所に育てゝ下さるのですから。此家の御子樣方は今に御金を澤山御貰ひなさるのですが、御前さんは一文もないのです。だから大人しくして皆さん

の御氣に入るやうにするのが當然でさあね。」

「かうして種々言つて上げるのもあなたの身の爲なのですよ」とベシーは慳貪都でなく言ひ添へた。「機嫌よくして、よく用でもするやうになさると、此家にも居られるでせうが、さもなくて、無禮な事なんかなされば、奥さんは必然他處へやつて御仕舞ひなさいます。」

「おまけに神樣の罰が當るさ」とアボットはいつた。「癇癪を起こしてゐる最中にポンと神樣が命を取つて御仕舞ひなさるかも知れない。其時は死んで何處へ行くでせう。さあベシーさん下へ行きませう。此子のやうな心にはどうかして成りたくないものだ。ジエーンさん、一人になつたら祈禱をなさい。悔い改めなさらないと、恐ろしいものが煙突から入つて來て、連れていつて仕舞ふかも知れません。」

二人は戸を閉めて、錠を下ろして立ち去つた。

○幼稚園保育ト兒童身體ノ發育及疾病ノ關係（抄錄）

（安西茂太郎氏）

著者ハ幼稚園ナルモノガ兒童身神ノ發達ヲ阻害シ或ハ其身體ヲ傷害スルモノナルヤ否ヤノ研究ノ第一歩トシテ、三箇ノ公立幼稚園ヲ有スル下關市ニ於テ、昨年及今年ノ四月全市尋常小學校第一學年ニ新入シタル兒童昨年八四七人、今年一一八五人ヲ檢査シタルモノ、内、前年ニ於テ就學義務ノ發生シタル者ニシテ疾病又ハ其他ノ事情ニヨリ就學ノ遲滯シタル予ノ所謂年長兒卽チ入學當時年齡滿七年二ケ月以上ノ者ヲ除キ、滿六年一ケ月乃至七年一ケ月ノ年齡ニアル全市ノ學齡兒ニツキ幼稚園ノ保育ヲ受ケタル兒童昨年一八九人、今年二三三人ト幼稚園ニ關係ナク家庭ヨリ直チニ入リ來タル兒童昨年五八〇人、今年八五九人ノ身體的發育及ビ疾病ヲ比較調査シタル結果ハ

一、幼稚園ノ保育ヲ受ケタル兒童ハ、然ラザル者ニ比シ、昨年ノ新入生ニ於テ男兒ハ身長體重胸圍ノ平均數量劣リ、女兒ハ身長胸圍ノ平均數量優ルモ體重ノ平均數量劣リ、今年ノ新入生ニ於テハ男女トモニ身長ノ平均數量ハ勝レドモ體重及胸圍ノソレハ劣ル。

二、幼稚園ノ保育ヲ受ケタル兒童小學校入校後一ケ年間ノ身體的發育增加量ハ、然ラザル兒童ノソレニ比シ男女トモニ身長及胸圍ハ敢テ甲乙ナキモ體重ノ增加量ハ優勝ナリ。

三、幼稚園ノ保育ヲ受ケタル兒童ノ體格ハ然ラザル者ノソレニ比較スレバ、男兒ニ在リテハ强健體格者及ビ薄弱體格者比較的少ナリ中等體格者多ク、女兒ニ在リテハ强健體格者比較的少ナク中等體格者及ビ薄弱體格者多シ。

四、幼稚園ノ保育ヲ受ケタル兒童ノ疾病數ハ、然ラザル兒童ノソレニ比シ昨今兩年ノ成績トモニ「トラホーム」及其疑似症ト脊柱彎屈ハ少ナキモ慢性鼻「カタル」、口蓋扁桃腺慢性肥大及齲齒ハ比較的多數ナリ。（兒童研究第十七卷第四號）